アジア舞踊の研究動向
1970年代から1980年代
（東南アジア編）

宮尾慈良

1

ここ数年にわたって，アジア各地の舞踊が日本の舞台で上演される機会が多くなって久しい。ここではそうした隆盛時以前における1970年代から1980年代にみられたアジア諸国の舞踊と研究の動向について記すことにしたい。

筆者は1971年と72年に東南アジアでの舞踊，演劇のフィールド・ワークを終え，1973年に香港での第1回の香港芸術（ホンコン・アーツ・フェスティバル）などを見ていたが，日本で大々的にこのようなアジア芸能の公演が一堂に会したのは，おそらく1975年に芸術祭30周年記念，放送開始50周年記念の「アジア民族芸能祭」が催されたことにはじまるとおもう。このときは，韓国の国立国学院，タイ国立舞踊団，インドネシアのプリ・プムチュタン舞踊団，フィリピンのバランガイ民族舞踊団，インドのマニプリ舞踊，マレーシアの国立舞踊団，ビルマ（ミャンマー）の国立舞踊団による上演がなされた。

ここでは，こうしたアジア芸能の上演をきっかけに，日本におけるアジア舞踊，音楽や演劇の研究にどのような影響をもたらしたのか少しく考え，これからこうしたアジア舞踊へ興味を抱き，研究したい若い学徒に研究への糸口，参考になればとおもっている。

2

ところで，「アジア民族芸術祭」が公演された翌年の1976年に国際交流基金と国立劇場の共催による第1回の「アジア伝統芸能の交流」が開催された。この公演はアジアをはじめ世界の民族音楽の権威者であった故小泉文夫氏が「日本との関連においてみるアジア諸国の伝統芸能」を研究するための場をもち，この分野での研究の発達を期待したことにはじまる。

そのときの小泉文夫氏の提言する言葉をプログラムから引用すると，

「近年アジアの伝統芸能に対する大方の関心がにわかに高まり，これに応じて各国から民族舞踊団を招いたり，民族音楽のレコードを発売したり，逆に日本の伝統芸能が東南アジアを訪れるなど，交流活動もひと昔まえには考えられないほどに盛んになりました。こうした関心を一時的なブームや興味に終わらせずに，わたくしたちの永続的な知識や文化的な自覚へ導くためには，アジアの伝統芸能の底に横たわる共通の水脈を掘りおこしたり，各国，各民族の地域的特徴を比較したりする基礎的な研究が必要です。

もちろんアジアの芸能に関する調査や研究は，これまでにも世界の優れた学者や芸術家によって行われ，その構造や理論も解明されてきました。そのお蔭で，わが国でも一部の研究家の間では，アジアの芸能の持つ深い相互関係や高い芸術的価値が認められています。しかし，こうした認識は決して十分ではなく，今後ますます深めていかなければなりませんし，また一般の人々にも広く参加していただかなければなりません。」

小泉氏はすでに世界各国でこのような芸能祭に参加していたからこそ，こうした企画を立てることができたのである。わたくしは影絵人形芝居の比較研究のためにインドネシアにて調査をしていた1971年の8月下旬から9月にかけてインドネシアのジャワ島とバリ島で行われた第1回「国際ラーマーヤナ・フェスティヴァル」で小泉氏が「こうしたアジアだけで比較研究する機会がもっと多くなければ研究者は育ちませんね」とおっしゃっていたことを思い出す。それから4年後，じっさいに日本にてアジア各国の芸能が上演され，このとき研究という学問的な場をもつとともに，多くの人々がアジア芸能に興味を抱き，アジアに対して芸能を通して理解を示したのである。これはこれまでにない画期的な出来事であったのである。

そして，その第1回は「日本音楽の源流を訪ねて」をテーマとして音楽からの比較研究が行われた。参加したのはインドネシアの西ジャワ・スンダ地方の合奏，マレーシア・サラワク州からサペーの演奏，フィリピンのルソン島からカリンガ族の民族楽器，タイの古典楽器の演奏で，これらと日本からの三曲，あずさ弓，アイヌのムックリ，尺八などが比較された。

この「アジア伝統芸能の交流」は，アジアに伝わるさまざまな芸能を比較研究することを目的として3年ごとに開催され，公演だけでなく，セミナーを開き，英文の報告書，レコード，16㎜の映画を記録してきているので，将来，研究する人には参考になるであろう。

第2回の1978年も音楽からの比較研究であった。テーマは「アジアのうた」である。参加したのはインドのバウル，ベンガルの民謡，イランの古典歌曲，モンゴルのホーミーと民謡である。このときの研究セミナーや記録としての英文書も刊行されている。

そして第3回の1981年に，はじめて舞踊からの比較研究が行われた。このときにはわたくしは国際交流基金からインドの仮面舞踊劇の調査を依頼されて1か月近くカシミールのラダック地方，ベンガル，南のケーララに出掛けた。このときは

インドといっても北と南では舞踊の形態も表現様式も違っていることを日本の人々に知ってもらうことと，比較という視点は日本との比較ではなく同じ地域での伝承性に焦点を当てて見たいというわたくしの考えが通った。そこで上演されたテーマ「神々の跳梁」で，アジアに伝承されている仮面劇の比較研究がなされた。参加した芸能はインドのカルナータカ州からヤクシャガーナ，西ベンガル州からプルリアのチョウ，ビハール州からセライケラのチョウ，ネパールからマハカリ・ビャクンであった。いうまでもなくこのときも研究セミナーおよび英文の報告書，16㎜が制作された。

第４回の1984年は「旅芸人の世界」をテーマとして，もっぱら旅する芸人を中心に比較研究の場が設けられた。参加した芸能はインド・ラージャスターン州のボーバ，マデヤ・ブラデシュ州からラーイー，タイ・イサーン地方からモーラム，韓国から男寺党である。放浪する芸人の伝承が，舞踊と歌，語りによってなされてきたことが分かったが，比較する視点がどこに置かれているかということが明確にならなかった。そうしたことから研究セミナーは開かれたが，報告書は「旅芸人の世界」というエッセイと写真の本（文庫）しかない。ここでは「語り」という言葉の問題が出てきたために，芸能というより言語，物語，階級，伝承手段などと研究するテーマが多すぎ，比較するものが散慢となった嫌いがないわけではない。

第５回の1987年は「アジアの神，舞，歌」がテーマで，中国の雲南省の民族芸能，パキスタンから歌謡グループのカワーリー，トルコからメヴィレヴィー旋回舞踊，日本からはアイヌの芸能が上演された。このときもテーマが神の芸能，舞踊そして歌謡であったために比較研究する視点が曖昧化してしまった。こうして公演を重ねるにしたがい，はじめの小泉氏の提言から離れて，アジアの芸能を上演する場になってしまったことは残念である。そして第５回の公演に当たる1990年には上演が行われなかった。その理由は知らないが，いま一度この公演をする意義が何であるかという原点に戻って比較研究の場をもたなければならないし，舞踊においては舞踊学会が積極的に参加しなければならないと考えている。

また，一方こうしたアジアからの芸能が日本各地で上演されると，1982年にはインドネシアのバリ島の古典音楽と舞踊劇が「ダルマ・サンティ舞踊団」によってトペン，ガンブ，レゴン，プレボン，バリスの上演が行われたりした。さらに1987年，インドネシアのバリ島タガス村から「グヌン・ジャティ歌劇団」の上演がおこなわれ，このグループはそれ以後日本での上演を定期的に行うようになった。

さらに中国の芸能は，1982年の京劇劇団，1984年の陝西省歌舞劇による「長安楽舞」，87年の四川省に伝わる川劇，88年の上海から昆劇，89年の河北省から梆子劇が続々と公演をしている。公演プログラムは日本文化財団が刊行している。

さらにインドの四大舞踊，ネパールの舞踊，韓国の古典舞踊や仮面舞踊などの上演が行われている。しかし，こうした日本での上演にもかかわらず小泉文夫氏が言うような比較研究はそれほど成果を見せないまま，ただ公演グループの興業あるいは上演することに意義があり，目新しさだけが先行してしまった感がしないわけではない。

こうしてアジア舞踊や劇に興味を覚える人も多くなった。そしてアジア芸能研究会も発足し，研究する場が早稲田大学におかれた。だが，専門的な研究となるとなかなか研究者がでてくるまでにはいかない。なお，アジア芸能の公演プログラムはさまざまな研究分野の人々による論文が掲載されているのでぜひとも参考にしていただきたい。

3

アジア舞踊の研究をする基本資料やこれまでの動向を見ながら，これから研究をする人を対象に研究への基本的な書物および論文などの文献を紹介しておきたい。なお，アジア芸能の文献目録の資料としては，かつて早稲田大学演劇学会で編集した『アジア芸能研究文献目録』（市川雅，蘇英哲，宮尾慈良，共編，1984年）を参考にした。この『アジア芸能研究文献目録』から，アジアの舞踊に関した書をひろいだし，解題を付しておいた。今回は枚数の制限上，アジア舞踊を記した書物を選んでみた。

(1) 中西武夫「東亜の舞踊」
教育図書，1943

アジアにおける舞踊を網羅的に述べた最初の本である。ただし，本の内容であるものはすべて外国人の研究からの翻訳である。しかし戦前においてはアジア諸国の文化，風俗習慣などを理解し，知ろうとする立場から書かれていることは大切な視点である。掲載されている内容をつぎに記しておく。表記は本書の通りにする。

インドの舞踊
インドの舞踊について　プラティマ・タゴオル
ヒンドウの舞踊　エルマル・エイ・ダース
サンティニケタンの舞踊　タリバラニイ
カタカリ　エイ・エイ・バーケ
古い世紀のドラマ　エメリ・ギルクリスト・ハッチ

タイの舞踊
タイの宮廷バレー　クサニア・ザリイナ

仏領印度支那の舞踊
インド支那の劇場　ドナルド・オウエンスラガア

ジャワの舞踊

ジャワの舞踊　　クレア・ホルト
ジャワの舞踊の精神と形式　アンドレ・ルルヴァンソン

パリの舞踊
パリ人ラプソディ　　ルス・ベージ
パリの舞踊　　マイグエル・コヴァルヴィイアス

(2) 宮尾慈良『アジア舞踊の人類学』
パルコ出版，1984

舞踊が社会，文化，民族全体のかかわりのなかでどのような繋がりをもってきたかをアジアの舞踊から考察している。実際の舞踊調査を記したフィールド・ノートと数多くの図版，舞踊解説が載せられている。

本書は人類学的な視点から舞踊へのアプローチをどのようにしたらいいかを記した「舞踊の人類学」，舞踊が表現してきた世界をコスミカルなエネルギーの顕現の場と考えた「舞踊のコスモロジー」，舞踊の身体とくに足と手から考察した「舞踊の身体学」，アジア各地に残されている舞踊的な資料をもとに研究した「舞踊の図像学」からなる。

なお，本書は1991年，韓国の民俗学者，沈雨晟によって『아시아舞踊，의人類学』（東文選，文藝新書19）として翻訳された。

(3) 藤井知昭監修『世界民族音楽大系Ⅰ』
平凡社，1988

アジアを東アジア，東南アジア，南アジアの地域文化圏に分け，各国の芸能（音楽，舞踊，舞踊劇）を解説した書である。これはビデオあるいはレーザー・ディスクの解説書であるので，視聴覚教材としては貴重なものである。ここでは舞踊と音楽の関わりを知りたい人や，これから舞踊を研究する人には動きがあるので参考になる。また比較研究も可能であろう。東アジアには韓国，中国（漢民族，雲南，チベット，新疆ウイグル自治区，モンゴル），東南アジアには，ベトナム，カンボジア，タイ，ビルマ（ミャンマー），マレーシア，フィリピン，インドネシア，南アジアにはインド，パキスタン，バングラデシュ，スリランカ，ネパール，ブータンが入っている。

日本学術会議だより

平成2年9月，日本学術会議は舞踊学会を「科学者により構成され，学術研究の向上発達を図ることを目的とする団体」と認定，舞踊学会は日本学術会議の審査した「登録学術研究団体」として登録された。

日本学術会議は7部に分けられ，第1部が，文学，哲学，教育学，心理学，社会学，史学，等で，舞踊学会はその中の地域研究の文化人類学，民俗学と同じグループである。

第15期日本学術会議会員の推薦人会議には郡司正勝会長が出席，日本民俗学会の祖父江孝男を会員として推薦した。

なお，第15期の活動は平成3年10月23日の総会で次のように申し合わせた。

日本学術会議は，学術に関する重要事項を自主的に審議し，我が国の学術研究の在り方についての方策を立案し，学術研究の成果を行政，産業及び国民生活に反映浸透させることを使命としている。このため，会員の科学的知見を結集し，時代の要請に即応しつつ将来を見通し，以下の視点から学術研究の一層の推進を図る。

人文・社会及び自然科学を網羅した日本学術会議は，全学問的視野に立ち，学術研究団体を基盤とする科学者の代表機関であることを認識して，全科学者の参加と意見の集約を図らなければならない。さらに，本会議が集約した科学者の意見を速やかに政策の形成に反映させるようにすべきである。特に学術政策については，他の関係諸機関との連携を強化し，その実現を図る。

また，学術研究団体を基盤とする日本学術会議は，関係ある学術研究団体等から推薦された科学者を中心として構成される研究連絡委員会の重要性を認識し，その活動を強化するとともに，学術研究団体との連絡を蜜にし，研究基盤の強化を図り，高度化する学術の発展に貢献する。

我が国の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議は，国際社会における我が国の地位の向上に照らし，海外諸国の期待と時代の要請にこたえて，学術の分野における国際貢献に積極的な役割を果たすべきである。

重点目標は，(1)人類の福祉・平和・地球環境の重視，(2)基礎研究の推進，(3)学術研究の国際貢献の重視とした。